三月の空の下

小川未明

青空文庫

花の咲く前には、とかく、寒かったり、暖かかったりして天候の定まらぬものです。その日も暮れ方まで穏やかだったのが夜に入ると、急に風が出はじめました。ちょうど、悪寒に襲われた患者のように、常磐木は、その黒い姿を暗の中で、しきりに身震いしていました。

A院長は、居間で、これから一杯やろうと思っていたのです。そこへはばかるような小さい跫音がして、取り次ぎの女中兼看護婦が入ってきて、

「患者がみえましたが。」と、告げました。

「だれだ？　初診のものか。」と、院長は、目を光らしました。

「はい、はじめての方で、よほどお悪いようなのでございます。」

まだ年の若い彼女は、こんなものを院長に取り次いだのは悪いとは思ったけれど、それよりも、目にうつる哀れな男の姿のほうが、いっそう強く心を動かしたのです。けれど、院長は容易に座を立ち上がろうとしなかった。

「そんなに悪いのに、ここへやってきたのか。」

「はい。」

院長は、きたときいては、捨ててもおけなかったのでした。どんな身分の患者であって、またどこが悪いのか、それを知りたいという職業意識も起こって、

「いま、ゆくから。」と、静かに、答えて、苦い顔つきをしながら、居間を出ました。
控え室をのぞくと、乞食かと思われたようなよぼよぼの老人が、ふろしき包みをわきに置いてうずくまっていました。
院長は、その老人と、取り次いだ看護婦とを鋭く一瞥してからいかにも、こんなものを…
…ばかなやつだといわぬばかりに、
「みてもらいたいというのは、この方かね。」と、ききました。
「さよう、私でございます。遠いところ、やっと歩いてまいりました。」と、老人はとぎれとぎれに答えました。
「遠いところ？　なんで、もっと近所の医者にかからなかったんだね。」
「だめです、いいお医者さんがありません。」と、老人は頭を左右に揺すりました。
（そうだろうとも、だれが、こんなものを見てやるものだ。このばかな女でもなければ、一目見て追い帰すにちがいない。いったい、医者というものをなんと心得ているのだろう。）
「おじいさん、せっかくだが、私は、これから急病人の迎えを受けているので、出かけなければならないのだ。だからすぐみてあげることができない。どうか、よそへいってもらいたい。」
院長は、そばに、まごまごしている、看護婦の顔をにらんで、奥へさっさとはいってしまいました。

「じゃ、どうしてもみてくださらんのか。」と、老人は、つぶやきました。

「お気の毒ですけれど、先生はたいへんお忙しいので、みられんとおっしゃいますから、よそのお医者さまへいってくださいまし。」と、看護婦は、そういいました。

「ははあ、よそのものはみても、私をばみられないとおっしゃるのだな。どうせ、この老耄はくたばるのだからいいけれど、そうした道理というものはないはずじゃ。もう私は歩けないが、どこか近所に、お医者さまはありますかい。」と、老人は、やっと小さな荷物をせおってから、ききました。

「じき、すこしゆくとにぎやかな町になります。そこには、幾軒もお医者さまがあります。」

少女は、暗い外の方を指して、町へ出る方向をおじいさんに教えました。ところどころに点いている街燈の光が見えるだけで、あとは風の音が聞こえるばかりでした。

ちょうど、その時分、B医師は、暗い路を考えながら下を向いて歩いてきました。彼は、いま往診した、哀れな子供のことについて、さまざまのことを思っていたのです。

その家は貧しくて、かぜから肺炎を併発したのに手当も十分することができなかった。小さな火鉢にわずかばかりの炭をたいたのでは、湯気を立てることすら不十分で、もとより室を暖めるだけの力はなかった。しかし、炭をたくさん買うだけの資力のないものはどうしたらいか、それよりしかたはないのだ。近所に、宏荘な住宅はそびえている。それらの内部には、独立した子供部屋があり、またどの室にも暖房装置は行き届いているであろう。そこに生まれ

育った子供と、あの貧しい家に病んでねている子供とどこに、かわいらしい子供ということに変わりがあろうか。しかし、その境遇はこうも異なっているのだ。私は、あの哀れな子供を助けなければならない。

B医師は、夕方、自分を呼びにきた、子供の母親の、おどおどした目つきと、心配そうな青ざめた顔とを思いあわせたのです。

「あんなになるまで、医者にかけないという法はないのだが、もう手後れであるかもしれない。」

悲壮な気持ちで、門を入ろうとすると、内部からがやがや人声がきこえました。

一足前、近所の人たちが、倒れている老人を連れてきたのです。

B医師は、すぐに老人に注射を打ちました。

「気がついた。おじいさん泣かんでいい。ここは医者の家だから、安心するがいい。」と、顔をつけるようにして、B医師は、燈火の消えかかろうとするような老人をなぐさめました。

「あんたは、お医者さまか。」と、老人は、かすかに目を開いてB医師を見て、たずねました。

「そうです、だから、安心なさるがいい。」と、答えてB医師は、自ら老人を抱えて、診察室のベッドの上に横たえて、やわらかなふとんをかけてやりました。

「先生、この人は、助かりましょうか。」と、老人をつれてきた近所の人たちが、ききました。

「わかりません。なにしろ極度に疲れていますから。私は、できるだけの手当てをいたします

が……。」と、B医師は答えました。

その夜、老人は、最後にしんせつな介抱を受けながら死んでゆきました。すこしばかり前、かたわらにあった小さな荷物を指しながら、訴えるように、うなずいて見せたのでした。

夜明け方になって、ついに雨となったのであります。B医師は、老人が身から離さなかった荷物を開けてみました。紙箱の中には、すでに芽を出しかけた、いくつかのすいせんの球根がはいっていました。また、古びた貯金帳といっしょに、なにか書いたものがほかから出てきました。それを見ると、

「私は、親もなければ、兄弟もない一人ぼっちで暮らしてきた。私の一生は、けっして楽なものではなかった。人のやさしみというものをしみじみと味わわなかった私は、せめて死の際だけなりと、医者にかかってしんせつにしてもらいたいと思って、苦しい中から、これだけの貯金をしたのである。どこで私は死ぬかしれないが、おそらく、しんせつな医者を探しあてて、その人の手にかかって死にたいと思っている。この金で死後の始末をしてもらい、残りは、どうか自分と同じような、不幸な孤独な人のために費ってもらいたい。」

こういうようなことが書いてありました。終生独身で過ごした、B医師はバラック式であったが、有志の助力によって、慈善病院を建てたのは、それから以後のことであります。もちろん、老人の志も無とならなかったばかりか、B医師は、老人の好きだったらしいすいせんを病院の庭に植えたのでありました。

しかし、A病院は、いまも繁栄しているけれど、慈善病院は、B医師の死後、これを継ぐ人がなかったために滅びてしまいました。その建物も、いつしか取り払われて、跡は空き地となってしまったけれど、毎年三月になると、すいせんの根だけは残っていて、青空の下に、黄色い炎の燃えるような花を開きました。そして、この人の心臓に染まるような花の香気は、またなんともいえぬ悲しみを含んでいるのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　10」講談社
　1977（昭和52）年8月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第6刷発行
初出：「民政」
　1934（昭和9）年3月
※表題は底本では、「三一月《がつ》の空《そら》の下《した》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：仙酔ゑびす
2012年5月6日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三月の空の下

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/